

不登校すみちちゃんを知ってるか

仲村ゆうな

【人物一覧表】

鈴原 凛	( 1 3 )	中学一年生
住岡 葉月	( 2 3 )	社会人一年目
鈴原 友子	( 3 9 )	凛の母親
鈴原 俊彦	( 4 3 )	凛の父親
住岡 百合子	( 4 8 )	葉月の母親
住岡 孝典	( 5 0 )	葉月の父親
井上 美帆	( 3 2 )	葉月の上司
今野 凧咲	( 1 3 )	凛のクラスメイト

【あらすじ】

不登校の中学生、鈴原凜（13）。凜には憧れの人がいる。それは数年前ネット掲示板で有名になった「不登校すみちゃん」。将来に不安を抱いている凜にとっては唯一の希望である。

ある日すみちゃんとコンタクトを取った凜。舞い上がるが、すみちゃんに学校に行った方がいいと諭される。意外な言葉に驚く凜。それにはすみちゃんこと、住岡葉月（23）の思いがあった。

葉月が中学の時ネット掲示板に書き込んでいたことは全て嘘。不登校でも人生を謳歌しているように見せていたが、実際は真逆の生活だった。社会人となった現在も社会に馴染めず休職中。

凜は自分をバカにしてきた人らを見返すため、「不登校系インフルエンサー」になることを決意。葉月にもアドバイスを求める。かつての自分を凜に重ねた葉月は協力することに。登校拒否の凜と出社拒否の葉月の交流が始ま

った。

二人でアイディアを出し合い作った動画は話題も集め、応援の声が届くようになる。だが反対に否定的な声も。気にしない凜だったが、あるコメントにより不登校になったきっかけのトラウマを思い出し、情緒不安定になる。また、葉月の不登校時代の話が嘘だったことを知り、絶望する凜。

ネットの誹謗中傷がクラスメイトのしわざだったと知った凜は、学校に向かい、動画サイトで生配信を始める。クラスメイトとの口論が全世界に配信される中、葉月は凜のもとへ向かう。そこで葉月は凜へ、これからの生き方を一緒に考えようと手を差し出す。未来を生きる勇気を出してその手を取る凜。

数年後、通信制高校に進学した凜。「通信制インフルエンサー」として細々と活動が続けていた。一方葉月はリモートワークの仕事に転職。別室登校ならぬ別室入社という形で会社と関わっていた。

「一生元不登校」である凜と葉月だが、それぞれ自分の人生を歩んでいくのだった。

○ネット掲示板画面

とある不登校児「不登校だけど質問ある？」

001 「なんで不登校なの？」

002 「女子？」

とある不登校児「V001理由はいろいろある」

とある不登校児「V002生物学上は一応そう」

002 「JKc. JCc.」

○鈴原家・子ども部屋（夜中）

暗い部屋の中ノートパソコンに向かっ

ているマスクを付けた鈴原凜（13）。

○ネット掲示板画面

とある不登校児「V002 中学」

003 「釣り乙」

004 「いまどき不登校がどうした」

○鈴原家・子ども部屋（夜中）

キーボードを打つ手が止まる凜。

○ネット掲示板画面

004 「いまだき不登校は何のアイデンティティにもならないけど大丈夫そ？」

○鈴原家・子ども部屋（夜中）

凜、再びキーボードを打ち始める。

○ネット掲示板画面

とある不登校児「すみちゃんを知ってるか」

○タイトル

『不登校だけど質問ある？』

○鈴原家・子供部屋（朝）

ノートパソコンに向かっている凜。

友子の声「凜ー？」

凜、慌ててノートパソコンを閉じ布団を被る。

鈴原友子（39）、ドアを開け入って来る。

友子「……家の中くらいマスク外しなさい」

友子、出て行く。

凜、布団から顔を出す。

○同・廊下

友子の声「はい。やっぱり朝になると……」

凜、リビングを覗くと電話をしている

友子が見える。

友子の声「はい……。今日も欠席で。はい、

すみません……」

○ネット掲示板画面

とある不登校児「不登校のカリスマすみちや  
んを知ってるか」

004「誰や」

005「あの伝説の?!」

○鈴原家・子ども部屋

一心不乱にキーボードを叩いている凜。



○ネット掲示板画面

とある不登校児「小学校から中学校まで不登校だったが難関進学校に合格。その後名門大学に入学しハイスぺ彼氏と婚約。エリート商社に就職した成功した元不登校」

とある不登校児「すみちゃんを知ってるか」

005 「オワコン」

006 「嘘松」

007 「不登校にそんな未来あるわけないだろ」

○鈴原家・子ども部屋

凜「……死ね」

○同・リビング（夜）

向かい合って座っている鈴原俊彦（4

3）・友子、凜。

俊彦「今日も学校行かなかったんだってな」

うつむいている凜。

俊彦「そんなんじゃないちゃんとした大人になれないぞ」

凜「ちゃんとした大人って何？」

友子「凜」

凜「てか大丈夫だし。不登校でも立派な人いるし」

俊彦「いないだろ」

凜「いるよ！」

友子「お父さん凜のこと心配してるんだから」

凜「心配しなくても大丈夫だよ！」

俊彦「あと家の中なんだからマスク外しなさい」

俊彦、凜のマスクを外そうとする。

凜、俊彦の手を払い出て行く。

友子「凜！」

○同・子ども部屋（夜）

布団にくるまっている凜。

泣きじゃくりながらスマホをいじる。

SNS画面を開き、アカウント名『すみちゃん』にダイレクトメッセージを送る。

○SNS画面

rin「不登校は死ぬしかないんですかね？」

○鈴原家・子ども部屋（夜）

布団に突っ伏して泣いている凜。

スマホの通知音。

凜、スマホを見る。

× × ×

ヘッドセットを付けている凜。

凜「もしもし…？」

すみちゃん（電話）「もしもし」

凜「わ！ こんばんは！ え、声かわいい」

すみちゃん（電話）「いやいや」

凜「本当にすみちゃん、さんですよね？」

すみちゃん（電話）「はい」

凜「うわあ！ すご！」

すみちゃん（電話）「いやいや」

凜「わはは！ すみちゃんとボイチャしてる

なんてやばい！ 私ネットで死に方探して

たときにたまたますみちゃんの板見つけて。  
不登校、将来、死ぬ、とかで調べてた時か  
な。全部遡って読みました！あと社会人  
になってからのアカウントも頑張って調べ  
てフォローして」

すみちゃん（電話）「あ、そうなんだ」

凜「急にDM送っちゃってすみませんでした。

でも返事返って来るなんて思わなかった」

すみちゃん（電話）「なんか、心配になって」

凜「あ……」

すみちゃん（電話）「……死ぬしかないなん

て、思っちゃダメだよ」

凜「……はい」

すみちゃん（電話）「それと、学校は行った

方がいいよ」

凜「え？」

すみちゃん（電話）「うん」

凜「何ですか？」

すみちゃん（電話）「やっぱり学校って社会

のいろんなことを学ぶ場だし、大人になる

前の勉強っていうか」

凜「じゃあやっぱ行けないなら死ぬしかない  
じゃないですか」

すみちゃん（電話）「いやそうじゃなくて」

凜「すみちゃんみたいに不登校でも成功でき  
る人なんて全然いないですよね」

すみちゃん（電話）「いや私は」

凜「やっぱ不登校は一生元不登校なんだ」

すみちゃん（電話）「あ……」

凜「それだったら、もう死ぬしかないじゃん」

友子の声「凜！」

凜、電話を切り布団にくるまる。

友子の声「凜！ 開けなさい！」

ドンドンとドアを叩く音。

友子の声「いつまで学校行かないつもりな

の！ そんなんで将来どうするの！」

○マンション・リビング（夜）

スマホ画面には『通話終了』の文字。

ため息をつく『すみちゃん』こと、住

岡葉月（23）。

○同・寝室（朝）

スマホのアラームが鳴る。

葉月「……あ！」

飛び起きる葉月。

葉月「やばい！」

葉月、慌ててベッドから出ようとするが、足がもつれて床に倒れる。

葉月「あ……。そっか」

葉月、アラームを止めもぞもぞとベッドに戻る。

× × ×

窓の外から子どもの遊ぶ声が聞こえてくる。

スマホのアラームが鳴る。

ベッドの上の葉月、アラームを止める。

時刻は十二時。

のそのそ起き上がり、

葉月「……よし」

○病院・待合室

うつむいて座っている葉月。

指のささくれを剥いている。

看護師の声「住岡さん。二番のお部屋にお入りください」

○同・診察室

医者「どうですか、眠れています？」

葉月「あ、はい」

医者、カルテに書き込みながら、

医者「薬はどう？」

葉月「あ、大丈夫だと思います」

医者「前回と同じ薬ね。また続けてみてください

さい」

葉月「はい……」

○薬局・入口

葉月、出てくる。

子どもの声「ちよっと待ってよー！」

ビクツとする葉月。

ランドセルを背負った子どもたちが走っていく。

葉月、胸を押さえて深呼吸する。

○マンション・寝室（朝）

スマホのアラームが鳴る。

葉月、アラームを止める。

起き上がるうとするが力が入らない。

葉月「……無理だ」

スマホが鳴る。

ビクツとする葉月。

画面を見ると『ママ』から着信。

葉月、恐る恐る出る。

百合子（電話）「あ、はーちゃん？ おはよ

う」

葉月「おはよう……」

百合子（電話）「ごめんねえ、朝忙しいのに」

葉月「ううん」

百合子（電話）「朝ご飯は？ 食べるの？」



葉月「うん」

百合子（電話）「作るの大変だったらスープとかでもいいからね。インスタントの。ママ送ってたでしょ」

葉月「うん」

百合子（電話）「あのねえ、はーちゃん」

葉月「……うん」

百合子（電話）「今日また荷物送るんだけど七時以降だったら受け取れそう？」

葉月「あ、うん」

百合子（電話）「おばあちゃんち行くついでさ、郵便局行っちゃうから」

葉月「うん」

百合子（電話）「じゃあ分かった。七時以降ね。送っとくね」

葉月「うん、ありがとう」

百合子（電話）「じゃあねー、はーちゃん。いってらっしゃい」

葉月「……いってきます」

○SNS 画面

アカウント名『すみちゃん』が『やっぱり社会のごみ』と投稿。

○マンション・リビング（夕）

床に寝転がってスマホをいじる葉月。

スマホ画面には SNS。

前の投稿を遡ると『消えたい』などの投稿。

『いいね』は付いていない。

スマホを床に伏せて置く。

葉月「……不登校は一生元不登校」

大きいため息をつく葉月。

葉月「……死にたい」

スマホの通知音。

葉月、スマホを見ると、『rin』からダイレクトメッセージが届いている。

○鈴原家・子ども部屋

ヘッドセットを付けている凜。

凜「この前はすみませんでした」

葉月（電話）「いえ、そんな」

凜「お母さんが来ちゃって」

○マンション・リビング

葉月「あー、そうでしたか」

凜（電話）「はい」

葉月「あー……」

沈黙が流れる。

○鈴原家・子ども部屋

凜「あの」

葉月（電話）「は、はい！」

凜「すみちゃん、あの……」

○マンション・リビング

凜（電話）「不登校は一生元不登校なんです

よね？」

葉月「えっと、それは……」

凜（電話）「だったら不登校として他の奴ら

と違う生き方したいんです」

葉月「え？」

○鈴原家・子ども部屋

凜「私も、すみちゃんみたいにならなくても大丈夫なんだから、立派になれるんだって証明したいんです」

葉月（電話）「全然私なんか」

凜「私は頭も悪いし、コミ障なんですすみちゃんみたいにはなれないけど、なんか別の方向で、成功したいんです」

葉月（電話）「別の方向？」

凜「例えば不登校系インフルエンサーとか！」

○マンション・リビング

葉月「い、いやあどうかな……」

凜（電話）「え、ダメですか？」

葉月「学校の人に知られたら嫌じゃない？」

凜（電話）「私のことなんか誰も覚えてないんで」

○鈴原家・子ども部屋

凜「とりあえず動画作ったんですみちゃんに  
アドバイスもらいたくて」

葉月（電話）「動画？」

○スマホ画面

マスクとサングラスを付けた凜が映っ  
ている。

凜「不登校あるある。全然知らないクラス  
メイトから励ましのお手紙が来る」

○マンション・寝室（夜）

プツと吹き出す葉月。

ベッドの上で横になってスマホを見て  
いる。

凜の声「不登校あるある。学校行事だけで  
も参加させられる」

葉月「あはは」

× × ×

凜（電話）「どうでした？」

葉月「おもしろかったです」

凜（電話）「あるあるでしょ？」

葉月「あるあるでした」

凜（電話）「バズるかなあ」

葉月「……あの。保健室とか謎の小部屋に登校することを勧められる……ていうのもある、よね？」

凜（電話）「……あるー！」

顔がほころぶ葉月。

○鈴原家・子ども部屋

凜「なんか使ってない準備室？　みたいなところ、机用意されてて！」

葉月（電話）「うんうん」

凜「学校っていう空間がもう無理なのにね」

葉月（電話）「分かる」

× × ×

凜「じゃあ、投稿、しますよ？」

葉月（電話）「はい」

ノートパソコンの画面には動画サイト。

凛、投稿ボタンをクリックする。

凛「……投稿しました！」

葉月（電話）「……おめでとう！」

凛「あー、緊張した。すみちゃん、ありがとう  
うございました」

葉月（電話）「いや私は何も」

凛「すみちゃんがいろいろアドバイスくれた

おかげです」

葉月（電話）「いやいや。ただ、私も懐かし  
くてなんか楽しくなっていっぱい喋っちゃ  
って」

○マンション・リビング

凛（電話）「すみちゃんもお仕事忙しいのに」

葉月「……大丈夫」

○会社・経理部

スーツを着た葉月、パソコンに向かっ  
ている。

女の声 「ずいぶんゆっくりやってるね」

男の声 「気が利かないね」

女の声 「バイトとかしたことはないの？」

男の声 「今まで何やってきたの？」

○マンション・寝室（夜）

葉月 「ハッ！」

飛び起きる葉月。

息が上がっている。

葉月 「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ごめんなさいごめんなさい」

暗い部屋で葉月の謝る声だけが響く。

○鈴原家・子ども部屋（夕）

友子、入って来る。

友子 「今日は早見さんって子だったよ」

友子、プリントを机の上に置く。

友子 「顔くらい出したらいいいんじゃない？」

「せっかくお友達来てくれたんだから」

凜 「友達じゃない」



友子「なんでそういうこと言うの？ 凜のた  
めにわざわざ届けてきてくれてるんだよ？」

凜「頼んでない」

友子「（ため息をつき）マスクも、いつまでつ  
けてるのよ」

友子、凜のマスクを外そうとする。

凜「触らないで！」

友子「（声が震えて）どうしちゃったの、凜。

なんでそんなふうになっちゃったの」

凜、ずれたマスクを直す。

友子「どうしてなの！」

凜「もうほっといて！」

凜、布団を被る。

友子「もういい！勝手にしなさい！」

友子、出て行く。

布団の中で泣きじゃくる凜。

スマホの通知音。

凜、スマホを見ると、『あかねさんがグ  
ッドを押しました』と通知。

○マンション・寝室

ベッドの上にいる葉月。

ぼんやりと天井を見つめている。

スマホが鳴る。

葉月「（電話に出て）はい」

凛（電話）「すみちゃん！ やったよ！」

○鈴原家・子ども部屋

ノートパソコンを広げている凛。

凛「今ね、二千……、あ！ 二千三百回再生  
されてる！」

葉月（電話）「え、あの動画？」

凛「そう！ しかも不登校の人からコメント  
めっちゃ来てて」

○マンション・寝室

凛（電話）「上履きとかジャージが同級生と

比べてきれいっていうの死ぬほどわかりま  
す、だって！」

葉月「あー、あれね」

凜（電話）「自分一人だけじゃないんだって  
元気もらいましただって」

葉月「ええ？ほんとに？」

○鈴原家・子ども部屋

凜「こんなん私たちヒーローでしょ」

葉月（電話）「それはさすがに」

凜「私がすみちゃんのこと知った時の感動を、  
ほかの人も体験してるってことですよ！」

○マンション・寝室

葉月「いや私は……」

凜（電話）「次はどんな動画撮ります？」

葉月「え？」

凜（電話）「次もバズったらどうしよう。  
めっちゃ楽しみですね！こんなに生きて  
て楽しいの久しぶり！」

葉月「……どんなの撮ろっか」

○動画サイト

マスクとサングラスを付けた凜が映っている。

凜「今日は不登校の勉強方法を紹介します。授業を受けていないので、教科書が先生代わりです。まず教科書は隅から隅まで読みます」

○マンション・リビング

スマホを見ている葉月。

スマホ画面には動画サイトのコメント欄。

葉月「ためになりました……。これならできそうです……。学校行ってる人たちには負けません……」

× × ×

凜（電話）「めっちゃ好評ですよ！」

葉月「よかったね」

凜（電話）「コメントも増えてきました。モニングルーティーンが知りたい、不登校になつた理由は……」

葉月「あ……。そういえばりんちゃんて……」

○鈴原家・子ども部屋

凜「あー……。私は」

凜、マスクを触る。

凜「……コロナなのにあんな人いっぱいいる  
とこ嫌じゃないですか」

○マンション・リビング

葉月「なるほど……。今どき……」

凜（電話）「あの、すみちゃんも一緒に動画  
出ませんか？」

葉月「いや私は……」

凜（電話）「だって二人のアイデアじゃな  
いですか。せめてすみちゃんの名前出すだ  
けでも」

葉月「いやいや」

○鈴原家・子ども部屋

凜「えー。絶対すみちゃんのこと知ってる人

驚くと思うけどなあ。ていうかあのすみちやんの勉強法だって言ったらより説得力増すし」

葉月（電話）「あれはあくまで例っていうか」  
凜「だってあれで難関校合格したんですよね。  
すごいなあ」

○マンション・リビング

凜（電話）「不登校なのに頭よくて、大学まで行っていていいとこ勤めちゃうんだもんなあ。  
すごいなあ」

葉月「……」

凜（電話）「すみちゃんは私の希望、いや不登校界の希望です！」

葉月「そんな……」

凜（電話）「だって不登校でも人生逆転できるって証明してくれたんだもん。不登校は一生元不登校ってすみちゃんの書き込み見たときはめっちゃ納得したし、超絶望したけど、でも、大丈夫ですよね」

葉月「……」

凜（電話）「私……大丈夫だよね？」

葉月、コメント欄をスクロールする。

『不登校は甘え。おとなしく引きこも  
つてろ』というコメント。

葉月「あ……」

凜（電話）「うん？」

葉月「あ、いや、なんでも……」

葉月、コメント欄をスクロールすると、

否定的なコメントも見られる。

コメント『クラスの不登校の子のお世話して  
ます。正直迷惑』

コメント『親がかわいそう。子ガチャ爆死』  
コメント『将来新聞に載りそう。悪い意味で』

葉月「……」

#### ○鈴原家・子ども部屋

凜「……ときどき変なコメントもあるけどさ、  
私全然気にならないです。勝手に言ってる  
って感じ」

葉月（電話）「気にしない方がいいよ」

凜「はい！ むしろ私なんかのこと気にして  
んの？ って感じ！ 教室にいたときは  
散々無視してたくせにね」

葉月（電話）「うん」

凜「あ、で、次はどんなの撮ります？ おすすめ

すめの平日昼の番組ランキングとか」

葉月（電話）「おもしろいかも」

凜「でしょ！」

○同・リビング（夜）

食卓を囲んでいる凜・友子・俊彦。

マスクの中に箸を運ぶ凜。

俊彦「食べにくくないのか？」

凜「うん」

友子「凜ね、最近自分で勉強してるのよ」

俊彦「そうなのか！」

凜「まあね」

俊彦「そうかそうか」

微笑む友子。



俊彦「じゃあこれです。いつでも学校行けるな」

凜、手が止まる。

友子「パパ」

凜、手で口を抑える。

友子「凜？」

凜、走って出て行く。

友子「凜！」

○同・子ども部屋（夜）

ベッドに横になっている凜。

友子、入って来る。

友子「具合どう？」

凜、友子に背中を向ける。

友子「お腹すいたらまだご飯あるからね」

凜「いらない」

友子、ベッドの脇に座る。

友子「ママ今日ね、実は学校行ってきたんだ」

凜「は？」

友子「先生と話しにね。それでこれ」

友子、凜に封筒を差し出す。

友子「今野風咲ちゃん？ って子からだって」

凜「風咲ちゃん」

友子「知ってる？」

凜、頷く。

友子「最初に仲良くなったって話してた子だ

よね？ 風咲ちゃん」

凜、封筒を受け取る。

友子「心配してるみたいよ。 ……凜が学校来るの待ってるって」

友子、立ち上がる。

友子「お返事、書いたら？ 便箋なかったら

ママ買ってきてあげるから」

凜「かわいいやつ？」

友子「（微笑んで）うん。とりあえず今日は

おやすみ」

友子、出て行く。

凜、封筒から便箋を取り出す。

○マンション・リビング（夕）

スーツ姿の葉月。

鏡の前で前髪を直している。

葉月「……よし」

○ 駅・改札前（夕）

辺りをキョロキョロ見渡す住岡百合子

（48）と住岡孝典（50）。

百合子、気づいて、

百合子「あ、はーちゃん！」

駆けてくる葉月。

葉月「お待たせ。迷わなかった？」

百合子「大丈夫。ね」

孝典「うん」

葉月「（前髪を直しながら）……仕事終わり

そのまま来たからスーツ」

百合子「うん。ありがとね」

孝典「何食べようか」

百合子「おいしいもの食べよう！ せっかく

だからね！ はーちゃん何食べたい？」

葉月「なんでもいいよ」

○中華料理店・店内（夜）

百合子「はーちゃん、杏仁豆腐あるよ。頼も  
つか」

葉月「いいよ、お腹いっぱい」

百合子「本当に？」

葉月「うん」

百合子、葉月の腕を擦る。

百合子「……こんなに痩せちゃって」

葉月「そんなことないよ。いっぱい食べてる  
よ。お昼もうち社食おいしいからそこで食  
べて……」

百合子、孝典をチラッと見る。

孝典、小さく頷く。

百合子「はーちゃん、おうち帰ってきたら？」

葉月「え？」

百合子「……お仕事、お休みしてるんだって？」  
葉月「……」

百合子「ママのね、知り合いで清掃会社に勤  
めてる人いるのね。前話したことあったか  
な。でね、はーちゃんの会社にも行ってる

んだって。でね、会社の人と話したときに」

葉月、うつむく。

百合子「ママたちそんなこと全然知らなかったから。どうして言ってくれなかったの？」

葉月「ごめんなさい」

孝典「別に謝ることないけどさ。心配なんだ

よ」

百合子「会社の人と何かあったの？」

葉月「……」

孝典「葉月。とりあえずさ、一人にはしておけないからうちに帰ってきなさい。うちでゆっくりすればいいさ。また会社に行けるまで」

葉月、小さく震えている。

百合子「ね」

葉月「ごめんなさい……」

葉月、涙を流す。

百合子、葉月の背中を擦る。

○住岡家・葉月の部屋

ベッドに横になっている葉月。

棚の上には高校入学時、大学入学時、  
入社時の家族写真が飾られている。

葉月、写真を見て、

葉月「ごめんなさい……」

涙を流す葉月。

スマホが鳴る。

葉月、スマホを見ると凜からの着信。

○鈴原家・子ども部屋（夜）

凜「あ、すみちゃん？ 最近返信返ってこな

いから心配になって。あ、迷惑でした？」

葉月（電話）「いえ……」

凜「あの、実は」

葉月（電話）「ごめんなさい。私もう無理で

す」

凜「え？」

葉月（電話）「偉そうにアドバイスなんてし

てたけどそんな人間じゃないんです」

○住岡家・葉月の部屋（夜）

葉月「私は全然成功なんかしてないし社会の  
ゴミだし生きている価値ないんです」

凜（電話）「え？」

葉月「あれ全部嘘なんです。不登校でもほか  
の人たちより人生勝ち組とか。掲示板に書  
いてたこと全部嘘です」

凜（電話）「どういうこと？」

葉月「学校行けなくて毎日が地獄だったし、  
頑張って高校行ったけど休みがちだったし、  
大学生になっても人とどう付き合えばいい  
のか分からないし、社会人になっても」

葉月、言葉に詰まる。

○鈴原家・子ども部屋（夜）

葉月（電話）「学校に行けなくて引きこもっ  
てたときのまんま。何も変わらない」

凜「……」

葉月（電話）「不登校は一生元不登校なんだ  
よ」

○住岡家・葉月の部屋（夜）

電話が切れる。

葉月「あ……」

葉月、布団に突っ伏して泣く。

○鈴原家・子ども部屋（夜）

凜、布団にうづくまる。

凜「大丈夫だもん……」

凜、涙をぬぐい、スマホを見る。

動画のコメント欄を見ると、

コメント『共感します』

コメント『次の投稿が楽しみ』

凜「ほら、大丈夫じゃん」

鼻をすすする凜。

スマホ画面をスクロールしていく。

コメント『こいつマスクの下ブスそう』

手が止まる凜。

コメント『超ぶすらしい』

コメント『隣のクラスです。ブスすぎて給食



食べられなくなって学校来れなくなったら  
しいです（笑）』

凜「はあ？　なんで……」

凜、だんだんと呼吸が荒くなる。

マスクを強く顔に押し付ける。

○（回想）中学校・教室

みな前を向いて給食を食べている。

黙食が行われている教室内。

マスクを外し、給食を食べている凜。

女子生徒数名、チラチラと凜の方を見

ながらアイコンタクトを取っている。

○（回想）同・廊下

男子と話している凜。

マスクを付けている。

女子生徒数名、凜に近寄って来る。

女子生徒1「鈴原さんてさー」

凜「うん？」

女子生徒1「マスク外した顔全然違うよね」

凜「え？」

女子生徒2「思ったー！ 人変わるよね」

男子「そう？」

凜、マスクを触る。

女子生徒たちの笑い声が響く。

○（戻って）鈴原家・子ども部屋（夜）

部屋の棚にはマスクの箱が大量に入っている。

凜、顔を隠すようにマスクを顔に広げる。

涙を流す。

○住岡家・リビング

ご飯を食べている葉月。

百合子「おいしい？」

葉月「うん」

百合子「よかった」

葉月「……ごめんなさい」

百合子「え？」

葉月「就職したとき、あんなに喜んでくれたのに」

百合子「……うん」

葉月「また、頑張れなくてごめんなさい」

葉月、涙を流す。

百合子、葉月の背中を擦る。

○鈴原家・子ども部屋（深夜）

布団の中でスマホを触っている凜。

スマホ画面には動画のコメント欄。

コメント『不登校の人ってなんであんなキモイの？』

コメント『この人学年で有名なやばい奴でした』

コメント『こいつの住所知りたい人はいいなして』

過呼吸気味になる凜。

× × ×

朝になった。

制服姿の凜。

ブレザーのボタンを閉める。  
マスクの位置を直す。  
まっすぐ前を見つめ睨みつける。

○同・葉月の部屋

カーテンを閉め切った部屋。  
ベッドに横になっている葉月。  
スマホの通知音。  
葉月、スマホを見ると『不登校すずち  
ゃんが生配信を開始しました』の通知。  
動画サイトを開く。

○中学校・校門前

制服姿の凜、校門の前で仁王立ちして  
いる。  
大きく深呼吸する。

○住岡家・葉月の部屋

スマホ画面には動画サイトの生配信が  
流れている。

中学生の姿が映る。

葉月「学校……？」

○中学校・廊下

休み時間で騒がしい。

凜、ずんずん歩いていく。

手にはスマホ。

○同・教室

凜、入って来る。

女子生徒1「気づいて、

女子生徒1「ねえ、あれ」

女子生徒2「え、やば」

しんと静まる教室。

男子生徒1「え、誰」

男子生徒1「あれだよ、あの机の人」

教室の隅にぽつんと置いてある机。

凜、教室を見渡す。

今野凜咲（13）が目に入る。

凜咲「凜ちゃん？」

凜、深呼吸する。

○住岡家・葉月の部屋

凜の声「お前らバカにすんなよ！」

配信画面は床を映している。

葉月「……」

○中学校・教室

凜「不登校はきもいとかオタクとか、何勝手に言ってるんだよ」

凜、キョロキョロ見渡して、

凜「門倉！」

男子生徒3「え、俺？」

凜、男子生徒3を見て、

凜「私の動画にアンチコメントしたのお前だろ！」

男子生徒3「お、俺は」

凜「リア垢でやってるからバレバレなんだ

よ！　そんで」

凜、風映を見る。

凜「あの動画が私だってクラスに広めたやつ」

○（回想）鈴原家・子ども部屋（夜）

手紙を読んでいる凜。

『不登校すずちゃんって凜ちゃんだよ  
ね？ クラスのみんな噂してるよ』と  
書いてある。

○（戻って）中学校・教室

凜「わ、私じゃないよ！」

女子生徒3「……あんた何なの？」

女子生徒3、凜の前に立つ。

女子生徒3「あんたが勝手に馴染めないで学  
校来なくなったんだよねえ？ それなのに  
いじめ調査されたり毎週プリント運ばされ  
るこっちの身にもなって？」

凜「……お世話係のことか」

凜「目をそらす。」

凜「手紙に書いてあった。お世話係の子たち  
がちよつと不満持ってるかもって」

凜「えっと……。書いたっけ？」

女子生徒3 「そうだよ、迷惑なんだよ」

凜 「もともとはあんたらが人の顔のことを」

女子生徒1 「はぁ？ なんのこと？」

女子生徒2 「別にうちらなんも言っていないよ

ね」

女子生徒3 「ただ単に雰囲気変わるねって言

っただけじゃん」

女子生徒1 「気にしすぎ」

女子生徒2 「自意識過剰なんじゃないの？」

女子生徒3 「は？ まさかそのせいで学校来

なくなつたとか言いたいの？ やば」

凜、マスクを触る。

男子生徒4 「お世話係って。お嬢様かよ」

男子生徒5 「あーあ、俺も学校サボりてー」

男子生徒6 「分かるー、宿題とかしないてい

いんだろ？」

次々と不満を口にする生徒たち。

凜、拳を強く握りしめる。

女子生徒3 「不登校系インフルエンサーとか  
言ってるけどどちらに迷惑かけといて何調



子乗ってんの？ キモイんだけど」

凜「じゃあ死ねばいい？」

凜、窓際に駆けて行く。

○住岡家・葉月の部屋

葉月「りんちゃん！」

配信画面には窓の外の景色が映る。

○中学校・教室

教師、教室に駆けこんでくる。

教師「鈴原さん！」

窓枠に手をかけていた凜、動きが止まる。

教師「お母さんからいなくなったって連絡が」

凜「学校来ただけです。いけませんか」

教師「あなたねえ」

凜「分かりました。じゃあもう来ません」

凜、教室から飛び出す。

教師「鈴原さん！」

○住岡家・葉月の部屋

スマホ画面には『配信は終了しました』の文字。

葉月、力が抜けて倒れこむ。

大きくため息をつく。

○住宅街

走っている凜。

呼吸が苦しそう。

○歩道橋

登ってきた凜、息が上がっている。

凜「……あー！」

凜、しゃがみ込む。

凜「……もう無理」

凜、立ち上がり手すりに手をかける。

スマホの着信音。

凜、スマホを見ると、『ママ』からの不

在着信が何件も入っている。

『すみちゃん』からの着信。

凜「(電話に出て) ……はい」

葉月(電話)「配信、見ました」

凜「痛々しいって思ってるでしょ」

凜、鼻で笑って、

凜「クラスの奴ら見返そうと思ってたのに、逆にバカにされてて。ほんと最悪。キモイ。

調子乗ってあんな黒歴史作って。もう死にたい」

葉月(電話)「そんなこと思わないで」

凜「何で？ だって死んだ方がいいじゃん！」

葉月(電話)「私なんて掲示板で超イキってたんだよ？ ちょっと勉強ができたからって学校行ってた人のこと見下してたし、だから掲示板でも盛って書き込んで。私の方が黒歴史だよ」

凜「デジタルタトゥーだよね。一生消えないし、じゃあ私が消える方が簡単か」

葉月(電話)「あの動画で元気もらえたって人だっていたよ」

凜「ほんの一握りでしょ？ あの教室の中で

何人いたと思う？ みんな不登校が調子乗ってキモイって思ってる」

葉月（電話）「みんなじゃないよ」

凜「みんなだよ！」

葉月（電話）「みんなって誰？」

凜「みんなは、みんなだよ……」

葉月（電話）「りんちゃん、学校だけが世界じゃないんだよ」

凜「大人はみんなそれ言うけど、私にとって  
はあの狭い世界が全てなの。そしてあの教室が人生。隅っこに放置されて腫物扱い」

葉月（電話）「そんなこと」

凜「すみちゃんだって掲示板に書いてた。学校っていう世界で生きられないならもうどこにも居場所はないって。あれは本当のことでしょ？」

#### ○住岡家・葉月の部屋

薄暗い部屋の中、呆然と立ち尽くしている葉月。

○歩道橋

凜「私無理だったんだ、あの世界で。生きれなかった。誰が悪いとかじゃない。私が馴染めなかった。うまくできなかった。それだけ」

凜、手すりに置いた手に力が入る。

凜「これから先だって絶対うまくいかない。だったらもう死ぬしかなくないですか？不登校は一生元不登校、負け組のままなんだから」

葉月（電話）「……そうかもしれない」

凜「え……」

葉月（電話）「どっかでやり直せるって、逆転できるって思ってた。でもそんなことなくて。うまくできなくて。やっぱり学校行っただけでよかったからかななんて思ってた。でももう過去に戻るなんてできないし、どうにもできないからやっぱ一生元不登校なんだって」

凜、歩道橋の下を覗く。

○住岡家・葉月の部屋

葉月「でもやっぱり死ぬしかないなんてこと  
はないと思うんだ」

葉月、カーテンを開ける。

部屋に光が入る。

○歩道橋

凜「死ぬしかないでしょ」

葉月（電話）「ううん」

凜「じゃあどうすればいいの！」

○住岡家・葉月の部屋

葉月「私も分からないよ。だから」

葉月、深呼吸をして、

葉月「だから、本当に私たちは死ぬしかない  
のか、考えていこうよ。私は考えていくよ。

元不登校として」

○歩道橋

葉月（電話）「それでうまくいったらさ、証

明になるじゃん。学校行かなくても大丈夫

だったって」

凜「そんなのできるかなあ」

葉月（電話）「やってみようよ」

○住岡家・葉月の部屋

葉月「りんちゃんが分からなくなっても、私が試してみるよ。学校行かなくても、大人になって大丈夫か。私がりんちゃんに教えられるようにする。元不登校だけど質問ある？」

○歩道橋

凜、しゃがみ込んで涙を流す。

友子の声「凜！」

友子、凜に駆け寄る。

友子「急にいなくなったから……探したんだよ！」

泣きじゃくる凜。

友子「学校、行ってたんだってね」

凜、泣きながら頷く。

友子「……どうだった？」

凜「……やっぱ無理」

友子「……うん」

友子、凜の背中を擦る。

友子「今日は頑張ったね」

嗚咽する凜。

○雑居ビル・撮影スタジオ

制服姿の凜（16）、カメラの前にいる。

マスクは付けていない。

凜「こんにちはー！ 通信制高校性、すずち

やんです！ 今日通信制あるある」

○動画サイト

凜「制服がコスプレみたいになる」

○雑居ビル・撮影スタジオ



葉月（電話）「りんちゃん？ 動画見たよ。

編集うまいね。見やすかった」

凜「ありがとうすみちゃん！」

葉月（電話）「投稿ペースも早いし。忙しい

んじゃない？」

凜「まあね。でも楽しい！ すみちゃんほど

うですか？」

○マンション・リビング

デスクチェアに座っている葉月（26）。

葉月「ボチボチかな。自分の時間も取れるか

ら自由って感じ」

凜（電話）「へえ〜。リモートワークかあ」

葉月「入社する人もいるけどね。うちは自由

に選べるから」

凜（電話）「会社行くのと家で仕事するのど

っちがいいんですか？」

葉月「うーん。私にはリモートがあってるか

なあ」

凜（電話）「別室出社じゃん」

葉月「あはは！ ま、人それぞれだよ」

凜（電話）「そうですね」

○雑居ビル・撮影スタジオ

凜「でも私もそっちの方が合うかもしれないし。リモートワークのどこ就職しよー」

葉月（電話）「もう就職の話？」

凜「うん！ とりあえず今のところの計画はー、高校のうちに制服いっぱい着てー、大  
学行ったら留学してー、リモートできる会  
社に就職してー」

葉月（電話）「すごい未来まで考えてるんだ  
ね」

凜「はい！ 超楽しみ！」

○マンション・リビング

凜（電話）「私、すみちゃんみたいになりたい  
な」

葉月「私？」

凜（電話）「うん」

目に涙が浮かぶ葉月。

○雑居ビル・撮影スタジオ

凜「ありがとう、すみちゃん。私にいろいろ  
教えてくれて」

○マンション・リビング

葉月「（微笑んで）ありがとう。あ、ごめん、  
そろそろ会議始まるから」

凜（電話）「はい、じゃあまた」

葉月「うん、またね」

葉月、電話を切る。

伸びをして、

葉月「……よし！」

葉月、パソコンの画面をつける。

葉月「お疲れ様ですー」

男の声「お疲れ様〜」

女の声「お疲れ様ー。住岡さん、この前の資  
料助かった〜。ありがとう」

葉月「よかったです〜」

○雑居ビル・教室

女性「凛ー、買い物付き合って」

凛「いいよー」

女性「服買いたいたんだよね。成人式のあと中学の同窓会あつてさ」

凛「そっか。彩さんガチで制服コスプレになっちゃう人か」

女性「お前なく」

じゃれ合う女性と凛。

凛「あはは！　いいよ、買いに行こ」

女性「凛は？　同窓会とかないの？」

凛「うーん、どうだろ。あつても行かないけどね」

女性「何で？」

凛「（笑顔で）学校行ってなかったんで！」

【終】